

令和6年度 碧南市地域福祉計画推進委員会 会議録

1 日時

令和7年3月4日（火）午前10時から午前11時45分まで

2 場所

へきなん福祉センターあいくる デイルーム1

3 出席者

(1) 出席者 8名

小田直樹、鳥居多佳子、三島博、清澤和音、鈴木たか子、三浦志朗、對馬幸司、高橋薫

(2) アドバイザー

日本福祉大学社会福祉学部 野尻紀恵 教授

(3) 事務局職員

ア 碧南市役所

福祉こども部長 深津広明、高齢介護課長 小林圭介、福祉課長 鈴木善三、福祉課社会福祉係長 山本昌弘、社会福祉係主事 畠山和也、矢野友也

イ 碧南市社会福祉協議会

地域福祉課長 中川英治、地域福祉係長 古川裕隆、地域福祉係主査 小島誠司、管理課児童係主任児童専門員 杉浦かおり

4 傍聴者

0人

5 議事

(1) 議題

ア へきなん地域福祉ハッピープランの進捗状況について

(ア) へきなん地域福祉ハッピープランの概要

(イ) 市民の意識調査結果

(ウ) 行政の取り組み

(エ) 社会福祉協議会の取り組み

イ 各地区の地域福祉活動の取り組みについて

(2) その他

6 議事の要旨

(1) 議題

ア ヘきなん地域福祉ハッピープランの進捗状況について

(ア) ヘきなん地域福祉ハッピープランの概要 及び (イ) 市民の意識調査結果
事務局が会議資料に基づき説明し、その後審議した。

<主な意見・質疑>

なし

(ウ) 行政の取り組み

事務局が会議資料に基づき説明し、その後審議した。

<主な意見・質疑>

【委員】：災害時の避難行動要支援者の把握について、近所の民生委員に見守りをしてもらえるのは安心できると考えている。

【委員】：たくさんの施策を行っている中で、重点ポイントを定め取り組んでほしい。また、各地域の取り組みを紹介するシンポジウムにはより多くの人に聞いてもらうことができるようにしてほしい。

【委員】：長年、福祉実践教室に行っている。小学生は障害について興味を示す一方で、大人になると見て見ぬふりをする人も出てくる。一人で生活する障害者にとって、声掛けをしてもらえるだけでも安心する。

【事務局】：シンポジウムについては多くの人に聞いてもらいたいと考えている。
来年度については、参加しやすい日程を検討したい。

【委員】：行政が取り組んでいる施策に様々なボランティア団体も巻き込んでほしい。

【事務局】：行政としても、様々な団体と協力しながら活動を広めていけるとよいと考えている。

【委員】：碧南市において、こども食堂が増えている。活動をする中で、ボランティアをやりたいという人は多いと感じている。しかし、何をしたらよいかわからない人が多いと思われる。ちょこボラという形でわずかな時間のお手伝いを募集している。

【事務局】：こども食堂については、市民の皆さんの主体性を持って展開している事業と考えている。重要な子供の居場所として考えている。今後、こ

ども施策の中央部に位置してくるのではないかと考えている。

(エ) 社会福祉協議会の取り組み

事務局が会議資料に基づき説明し、その後審議した。

<主な意見・質疑>

【委員】：西端地区の取組で買い物支援があった。具体的にどのようなことをやっているのか。

【事務局】：地域の有志の人が運転を行い、免許を返納した住民の買い物支援を行う。

イ 各地区の地域福祉活動の取組について

事務局が会議資料に基づき説明し、その後審議した。

<主な意見・質疑>

【委員】：今日話を聞いて、碧南の取組は着実に進んでいると感じた。各地域の活動が見える化し、広く伝えてほしい。地域福祉づくりはまちづくりであり、ゴールはないと思う。次々と新しい課題が出てくると思う。スピード感は欲しいが、終わりが無いということを認識しながら取り組んでいきたい。

【事務局】：終わりが無いことの話になるため、達成の評価が難しい。地域の人と一緒にやっていける体制づくりが必要。

(3) その他

特になし。

(4) アドバイザー（日本福祉大学社会福祉学部 野尻紀恵 教授）による総括

～ 総括 ～

地域福祉は「すべての人が参加できる」といったキーワードを使いながら、対象を分けていかないことが大切。地域というごちゃまぜの中で対象者を理解していくことが重要である。

大人は知らないことに対して無関心である。こどもが声をかけると親も関心を抱く。学校で行われる福祉実践教室を契機に、地域のボランティアをやることによって、学んだことが地域での活動体験となる。知識から体験となり、主体となって活動を経験することが大切である。

碧南市の強みは社協と市が強い結びつきを持っていることである。計画を一体とし

て作っていることが強み。碧南の地域福祉は進んでいないようで、実は進んでいる。様々な施策を行う中で、活動の意義付けや事業の見える化をした方が良い。

市のホームページでは、生活困窮の部分にこども食堂が掲載されている。掲載するカテゴリーの再検討を行ってほしい。全体に開きつつ、こども食堂に来るこどもを観察し、気になる点があれば専門職につなぐという取り組みが全国的な流れである。

実はボランティアだけど、本人はボランティアだと思っていない活動がある。よって、何度調査をしてもボランティアについての計量的な数値が変化しないこともある。調査項目の工夫が必要である。事務局と共有し、計量の仕方も考えてみたいと思う。